シカゴ大学の事など

江口　徹（物理学教室）

広報係の方から新任教官としての自己紹介をかねて何か書くようにというおすすめなので，私が昨年末まで6年余り過ごした米国の様子，特にシカゴの町と大学の様子を中心に書く事にします。

私が米国に渡ったのは1974年の夏で，シカゴ大学（74～76，78～80）とスタンフォード大学（76～78）に籍をおきました。米国の印象は一言にいって極めて多様で巨大な国で，単一民族が狭い国土に住んでいる状況に慣れた者にとってはいささかとらえどころがないといった感じでした。たとえばシカゴの町とスタンフォード大学のあるサンフランシスコ郊外とは，気候も風土も全く異なっており，生活様式にもかなりの違いがあります。特にニューヨーク，シカゴのような大都会ではスラムとか犯罪とかいった都市特有の問題をかかえており，大都会以外の米国とは際だった対称をなしています。

シカゴの町は五大湖の1つのミシガン湖に面し，米国のほぼ中央部に位置する米国第2の都会です。イリノイ州，ウィスコンシン州，オハイオ州などで代表される米国の中西部は，ニューヨーク・ボストンなど国際的な色あいの強い東部や，急進的なカリフォルニアに代表される西部とちがって，何となく泥くさい感じがしますが，勤勉・実直な典型的米国人の住む所だとされています。

シカゴ大学は，down town（高層ビルのある市の中心街）から南へ10マイルほどの所にあって，キャンパスの周囲2マイル四方位に大学関係者が集中して住んでおり，その外側はスラムに囲まれています。シカゴにいる間よく治安についてたずねられましたが，残念ながらあまりよいとは言えません。夜遅く1人歩きしないというようなルールを守って生活する限り事故にあう事はほとんどないようでしたが，学生の人などは慣れからだんだん大胆になって，無理をして被害にあうという事が時折あったようです。

シカゴ大学が日本で知られているとすれば，多分Fermiらによって原子核の連鎖反応が初めて実現された所としてだと思いますが，原子炉のあった場所は現在図書館がたっており，その前の芝生に記念の彫刻が置いてあります。ここで行なわれた実験が，広島・長崎の原爆へとそのままつながっていったわけで，日本人として複雑な気持がします。

私の関係した物理学教室は，現在，南部陽一郎（素粒子論），S．Chandrasekhar（天体物理）L．Kadanoff（統計物理），J．Cronin（高エネルギー実験），U．Fano（原子物理）E．Parker（プラズマ），ら著名な研究者をかかえており，Fermi以来の伝統を受け継いでいます。南部教授は，私が特にお世話になった方ですが，日本人教授は，他に，藤田哲也教授（気象），入江昭教授（国際政治）らがいて大いに活躍されています。

ここ数年アメリカの経済は著く不調で，多くの私立大学がその影響を受けて経営に困難をきたしています。シカゴ大学もfacultyの5％削減などの努力で，なんとか2～3年前にどん底を脱したようですが，人文系での学生数の減少が大きな問題になっていました。これは，全体にアメリカで高等教育を受ける人間が減っているためで，その原因としては高等教育を卒業してもそれにふさわしい職が得られない事が上げられています。

米国では研究者間の競争が日本よりはげしいと言われます。これは確かにそのとおりだと思いますが，私の感じた所ではむしろ研究者という者に対する社会の通念にかなりの違いがあるような気

がします。日本の場合，大学の教官や研究者は何か貴い職業に従事している者として，社会の変動その他から保護されるべき存在であるとされているようですが，米国の場合，研究者はその専門知識という特殊技能によって生活をたてている一種のプロフエッショナルで，その意味で，プロ野球の選手やフットボールの選手と異なる所がないといった通念があります。そこで研究者といえども特別に保護されるべきでなく，社会一般の自由競争の原理に従うべきものであると考えられます。

研究費に関しては，まだまだ日本は貧困のようです。米国では，研究費（NSF，DOE などの政府機関からくる）から博士コースの学生の奨学金秘書の給料，助手の給料，教官の給料の一部などをまかなうので直接比較できませんが，理論の場合でも日本の10倍位はあると思います。米国の場合（理科系），日本の助手にあたるのはいわゆる post－doctoral position といわれるものですが，これは大学の正規の職ではなく教官の研究費によって個人的にやとわれるもので，研究の成果があがると研究費も増えて，元気のいい若い人を沢山雇えるという仕掛になっています。ただし，近年では大学のポストの不足のため，post－doctoral position から正規の職に上がる事のできない人が増え，2年位の任期で職場を転々と渡り歩かなければならないという状況が増えています。

以上，雑然と書いてきましたが，最後につけ加えますと，一昨年あたりから米国で日本に対する関心が急激に高まり，「なぜ日本の経済はうまくいくのか？」といった問題意識で，テレビでも日本の自動車会社や，満員電車，受験競争，お見合いなどの様子が何度も放送されました。海外にいる日本人としてこうした日本ブームには誇らしい気がしましたが，同時にはたしてそんなにうまくいっているのかといった面映ゆい感もありました。確かに日本は比較的高い水準の労働力や商品を大量に作り出す点で成功をおさめてきたといえると思いますが，これからはさらに先進的，独創的な科学技術の開発が必要とされていくはずで，こうした点からいっても，大学における研究，教育の責任はますます重くなっていくと思われます。